

Title	ウイトゲンシュタイン, 言語の限界, 飯田隆著
Sub Title	"Wittgenstein", Takashi Iida
Author	岡田, 光弘(Okada, Mitsuhiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1999
Jtitle	哲學 No.104 (1999. 12) ,p.77- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

## ウィトゲンシュタイン：言語の限界

飯田隆 著，講談社 1997年。

岡 田 光 弘\*

ウィトゲンシュタインは20世紀の思想界における象徴的存在の一人に必ず数え挙げられる思想家である。20世紀を振り返り、この世紀を代表する思想家を列挙する企画本が最近数多く刊行されているが、そのような企画には必ずと言ってよいほどウィトゲンシュタインの名が列ねられている。狭い意味での英米系の言語分析哲学に対する影響が決定的であったのみではない。20世紀思想界のひとつの特徴をなすのは、「言語」という視点から思想を形成することにあつたと言えるが、「言語」の視点に立った20世紀思想のひとつの原点がウィトゲンシュタインに見いだせるのである。しかも、哲学だけでなく、社会学、心理学、記号学、科学論に至るまで実に広い範囲でウィトゲンシュタインの影響が語られている。このように今世紀思想界の象徴的存在のひとりであり、広範囲の影響を与えた思想家であるにもかかわらず、同時に、彼のテキストは20世紀のもっとも難解な哲学的テキストのひとつであるのも事実である。

本書は、「言語哲学大全」のシリーズなどを通じて言語分析哲学の全体像について明解で本質をついた解説を行っていることで定評のある著者飯田隆氏によるウィトゲンシュタイン論である。ソクラテスの「多くのひとは知らないのに知っていると思っているが、私は自分が知らないことを知っている」という主知主義西洋哲学の出発点になった言葉と対比して、最終章で著者飯田氏はウィトゲンシュタインだったらつぎのように言うだ

\* 慶應義塾大学文学部哲学専攻 教授

ろうと指摘して、ウィトゲンシュタインにとっての哲学の意味に対する基本的態度を総括する。「哲学にはまりこんだ人々はみな、知っているのに知らないと思っているのだ、そして、自分の役目は、本当は知っているのだということをそうした人々に思い出させてやることだ。」日常的な態度において一般の人々に見過ごされている謎を暴くことから哲学は出発するが、その謎の解決を目指して哲学者たちは体系的理論を構築しようとし、そこから謎が謎をよぶ構造が生まれる。「謎の解決は何をめざすのか。……謎の出現によっていったん失われた自明さをふたたび回復しようという努力の現れではないか。だが、哲学の謎のもつ特有の魅力は、その解決が、失われた自明性の回復を目的とすることをつい忘れさせてしまう。」と著者はウィトゲンシュタインの立場を代弁する。我々の言葉の使われ方のありのままを記述することを通じて、哲学的問題から自明性を回復させることがウィトゲンシュタインの取った態度であり、哲学には発見も理論構築もないという考え方である。（これは特に「論考」より後のウィトゲンシュタインの態度を表明したものと見なせるが、「論考」におけるウィトゲンシュタインも「論考」で展開される理論自体は「語られず、示される」だけのものと考えていたという点で、この態度は「論考」ともある種の連続性を持った態度であると評者には感じられる。）

著者飯田氏が本書で示すウィトゲンシュタイン解読も、このウィトゲンシュタインが提示する哲学することの意味を具現しようという試みとみなすことができるように評者には思われる。とくに、ウィトゲンシュタイン哲学の核心を理論や神秘的なものに求めようとせず、哲学の病から自明性を救い出すことだけにあると捉えること自体、著者自身がそのような態度を実践しない限りウィトゲンシュタインから引き出すことができない帰結であろう。（そうでないと、後期ウィトゲンシュタインから理論を構築してみせようとしたり、テキストに書かれていない神秘的な教示を読み取ろうとしたりしてしまうこととなる。）

本書は、ウィトゲンシュタインの人と哲学についてその両方に同等の比重を置いて書かれた21章からなる「エッセー」である、とまえがきで特徴づけられている。実際には、彼の生き方に焦点をあてることは彼の哲学および哲学に対する態度、哲学の取り組み方のよりよい理解のために必要となると同時に、そのような哲学的側面に焦点をあてるのが彼の生き方の理解に必要となる、という互いに絡み合った関係にある。多くの思想家や芸術家にとっても同じことが言えるであろうが、本書を読んで、このことがウィトゲンシュタインに特に当てはまることであることを評者も再確認した。ただし、本書の基本はウィトゲンシュタインの哲学の方にあり、ウィトゲンシュタインの人間側面の解説に流され過ぎることなく、あくまでも哲学と人生との関わりを描くことを通して、ウィトゲンシュタインの人間としての魅力を浮彫りにすることに成功しているということが出来る。さらに巻末付録として「ウィトゲンシュタインの略年譜」、「主要著作ダイジェスト」（前期、後期の主要著作2冊のダイジェスト）、「キーワード解説」、「読書案内」が続き、最後に飯田氏らしい研究へのまじめさが現れているあとがきで本書は終わっている。著者は21章からなるエッセーのそれぞれが「比較的独立した」ものであると序文で断っているが、それにもかかわらずこの21章は伝記的な背景や思想の発展、変化を考慮して配列されているようで、章と章の間に緩い関連が見いだせる。（逆に、緩い関連が気になってそれをはっきりさせて読みたいというような評者のような読者には、関連性が緩すぎてぼやけてしまって把握しづらい面も多少あった。）

本書全体を通じて、これまでに公にされてきた草稿、書簡、回想録、伝記、などをふんだんに取り入れて分析が行われている。これにより本書で取り上げられた各テーマに対するウィトゲンシュタインの議論の背景が見通しの良いものになっている。必ずしもウィトゲンシュタインの著作の内容や主要テーマに対して網羅的に解説を目指しているわけではない。（た

だし、付録がこの点を補うことを意図して付されているようである。) ウィットゲンシュタインの哲学に対する態度、とくにウィットゲンシュタインにとって哲学するとはいったいどんな意味をもっているのかという点が、21の章全体を通じて浮彫りにされてくるような印象を評者は受けた。一見メタレベルの考察であるようにみえるこの「哲学とはなにか」に対する考察が実はウィットゲンシュタイン哲学の内容の核心であることが最終章の最終節で明らかにされる。それが先に挙げたソクラテスの言葉との対比で著者が代弁する哲学的態度、即ち、哲学的問題の魅力に誘惑されて謎が謎を呼ぶ哲学特有の理論体系の罠に陥ることを逃れてありのままを記述し自明性の回復へ向かうというウィットゲンシュタインの哲学的態度である。

先にも触れたが、21の章の個々のテーマに対する著者のウィットゲンシュタイン解釈も、このような態度を実践することによって遂行されている印象を受けた。例えば第7章で、「論考」全体をどう読むかに深く関わる「語られず示されるもの」の意味に関する著者の自然な「独我論」的解釈が、語られず示されるものの究極として（神や善や美ではなくて）「私」および「言語の存在」自体へと向かうのも、このような態度から出てきたものであろう。また第17章での、ウィットゲンシュタインの「私的言語批判」の議論に対する書著飯田氏の解釈の提示もこのウィットゲンシュタインの哲学に対する態度の実践例と言えるのではないか。ここではこれまでの「標準的見解」（ウィットゲンシュタインはここで私的言語の不可能性を論証している、とする見解）やクリプキによる「魅力的」解釈からでてくる様々な問題点や新しい謎を紹介したあとで、「私的言語」の議論が「感覚の表出」に関するウィットゲンシュタインの議論のコンテクストで解釈されるべきであるという。著者の見方によれば、「私的言語」の議論は、感覚に関する言葉を感覚の表出と結び付けることなしに感覚の名として直接結び付けることの不可能性を示している。そうするとこの「私的言語」の議論はこれまでの種々の解釈のような中心的な位置を持つことはなくなり、

感覚と名の関係に関する考察のひとつの寄り道でしかなくなる。(これがより自然なよみかたであり、これまでの学界内での種々の解釈は魅力的なものではあったが、哲学特有の謎が謎を生む袋小路の中に入っていきような解釈であった、それに対して上記のような解釈は自明性への回復をめざす自然な解釈である、と著者はここで言いたいのではないか.)

21の章の他の内容をすべて枚挙するスペースはないが、そのなかのいくつかを挙げると、前期ウィットゲンシュタインの代表作「論考」の成立史および論考はどのように読まれるべきかについての著者の立場を序文の解説を具体的にしてみせることによって読者に示すこと、ウィットゲンシュタインの要素命題との関わりにおいて「否定」をどのように捕らえたらよいかという問題、また要素命題と論理的原子論、現象主義との関わりに関する批判的検討、「命題は実在の像である」という「論考」の言語観の中核となす「写像説」の考え方がどのような背景から出てきたか、後期ウィットゲンシュタインの代表作とされる「哲学探求」の原稿の成立史(特に、現象言語、哲学的文法、検証などの概念を通じて1929年以降のウィットゲンシュタイン思想がどのような変更を遂げたかを追っている)、意味と検証の関連について論理実証主義者たちの検証論的意味論とウィットゲンシュタインの立場との違いがあるか(また、ウィーンの論理実証主義者たちとウィットゲンシュタインとの間に生まれた誤解や悲劇)、「言葉の意味とはその使用法である」という立場に立ったときに問題となる「使用規則に従う」ということをどのように理解すべきかに関して、それがその規則を心で知ってその知識に従うという心的プロセスを経たものではなく、「規則に従う」という「実践である」というウィットゲンシュタインの立場、などをはじめ、あとで触れるが私的言語批判、数学の哲学、心理学の哲学などのテーマも見いだされる。

このほかにウィットゲンシュタインの性格を伝えるいくつかのエピソード(奨学金にまつわる2つのエピソード、「告白」事件、建物の設計、弟子

の悲劇，など)，ウィトゲンシュタインとケンブリッジとの関わり（ラッセルやムーアとのこと）およびオックスフォードとの無関係（オックスフォード日常言語学派が定説とは違って実はいかにウィトゲンシュタインから直接的な影響を受けていなかったか），など豊富な情報に溢れている。

ウィトゲンシュタインの周りの人たちの回想および豊富なウィトゲンシュタインのテキストの引用が本書にちりばめられているだけではなく，種々の文献や考えにはじめて触れたときの著者自身の個人的な感想や驚きや興奮の表明が数多く添られていることも本書の特徴である。これらが著者の個人的なウィトゲンシュタイン解読史をなしている。読者にとってこのような興味深いスタイルがとれたのも著者が本書を「エッセー」の集まりとして構成したことの効果と考えられる。

例えば，第11章の要素命題の現象主義的解釈をめぐる考察のなかでも，多くのウィトゲンシュタインのテキストの引用や学界内で大きく揺れ動く定説の動向が伝わってくるだけだけでなく，著者自身があるウィトゲンシュタインのテキストを発見したときこの問題に対してどう感じたか，またある論者の新しい見解に対してどう説得され考えを変えたか，といった個人的な歴史がいきいきと伝わってくる。

本書の前半の各章のまとまりに対して，後半の何章かは多少舌足らずな議論で終わっているように評者には思われた。例えば，「ウィトゲンシュタインの心理学の哲学が曖昧で方向性を欠いているようにみえるかもしれないが，われわれが取り組むべき文法的考察のための，ありあまるほどの素材とヒントを含んでいる」と著者は第19章を結んでいる。その素材やヒントを現時点で著者がどう捉え，どのような方向性をもって調理しようとしているのかが読者としては知りたいところである。また，第18章ではウィトゲンシュタインの数学の哲学に対するウィトゲンシュタインの立場を厳格有限主義と捉える見方を著者は批判し，ウィトゲンシュタインのいう「あるがままの」本来的数学とは厳格有限主義ほど狭くないが集合概

念を背景に持つ現在通常の「数学」として通用しているものよりもずっと狭いもの、として、「ウィトゲンシュタインの数学論を真剣に受け止めるならば、数学者たちが現に用いている数学言語は大幅な改変を迫られることになる。」と述べているが（第18章最終パラグラフ）、この本来の数学と考えられるものが厳格有限主義と具体的にどのように違うのかは本書からは明らかでないように思う。第20章の「確実性の問題」に関しても世界像命題の雑色性に言及したあとで、「しかし、ウィトゲンシュタイン最後の考察に、私はむしろ、多くの未解決の謎を見る」とこの章を結んでおり、読者が期待する著者の見解が本書では先延しにされた観が残る。これらの問題に対しては将来の著作に期待したい。

本書を通じて、ウィトゲンシュタインの思想を「論考」の立場の前期と「哲学探求」の立場の後期というふうに二つに区切って読むことが間違っていることが読者に伝わってくる。前期と後期の間には数多くの中間期があり、それぞれの時期の別々のウィトゲンシュタイン思想がある、と考えるのも誤りであろう。そのことは本書のなかで同様な問題が形を変えて何度も取り扱われていることからわかる。例えば、「論考」の要素命題、一時期の現象言語の命題、感覚の哲学的文法、確実性の問題や心理学の哲学で素材とした命題、などの間には、そこで取られている立場や捉え方を超えた共通の問題性が浮かび上がってくる。ウィトゲンシュタインのいろいろな時期の種々の考察全体を視野にいれて議論するスタイルが今後重要になってくるのではないかという印象をうける。そのことを通じてさらにウィトゲンシュタインよりも一步さきへ考察を進めること、それが真のウィトゲンシュタイン研究者たちに今求められていることではないだろうか。本書のあとがきで披露されている「ウィトゲンシュタインを超える」という著者飯田氏の目標もこのことと深く関わっているように思える。